

学校支援地域本部事業における学校支援 ボランティアの動機づけに影響する要因の検討

—自己決定理論にもとづく心理的欲求の観点から—

岡田 涼 ・ 時岡 晴美 ・ 大久保 智生 ・ 岡鼻 千尋*
(発達臨床) (人間環境教育) (学校教育) (高松市立牟礼北小学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*761-0121 香川県高松市牟礼町牟礼2900-1 高松市立牟礼北小学校

Examination of the Factors that influence School Support Volunteer Workers' Motivation: Basic Needs in Self- determination Theory

Ryo Okada, Harumi Tokioka, Tomoo Okubo and Chihiro Okahana*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Mure-kita Elementary School, 2900-1 Mure, Mure-cho, Takamatsu 761-0121*

要 旨 本研究では、学校支援地域本部事業における学校支援ボランティアを対象に、ボランティア活動中の心理的欲求の充足経験が動機づけに及ぼす影響を検討した。パス解析の結果、学校支援ボランティアの動機づけには、心理的欲求の充足経験が関連していることが示された。以上の結果から、ボランティア活動のなかで、①特技を生かし、自己決定感をもてるかたちで担当を割り振ること、②生徒との交流を増やすこと、の必要性が示唆された。

キーワード 学校支援地域本部事業 学校支援ボランティア 動機づけ 心理的欲求
自己決定理論

問題と目的

近年、学校と地域とのつながりが重視されている。学校を地域のなかに位置づけ、両者の連携のなかで子どもの学習や発達を支えていくことが求められている。そのなかで、学校の教職員やPTAとともに、重要な役割を果たすのが学校での活動に参画する学校支援ボランティアである。本研究では、学校支援ボランティアの動機づけを支える心理的要因について検討する。

学校支援地域本部事業の概要と成果

学校と地域との連携を推進しようとする試みとして学校支援地域本部事業がある。学校支援地域本部事業は、平成20年度からはじまった文部科学省の委託事業であり、地域住民をボランティアとして派遣することで、学校での様々な活動を支えようとするものである。地域コーディネーターを中心として学校支援地域本部が設置され、地域住民が学校支援ボランティアのかたちで学校での活動に参画する。文部科学省(2008)は、ボランティア活動の内容として、

①学習支援活動, ②部活動の指導, ③校内の環境整備, ④登下校時の子どもの安全確保, ⑤学校行事の運営支援を挙げているが, 実際には学校や地域のニーズあるいは特色に応じて, 多様な活動が展開されている (高橋, 2011)。

学校支援地域本部事業に取り組んでいる学校では, 様々な面での教育効果が得られている。たとえば, 文部科学省 (2010) による調査では, 学校支援地域本部事業の実施校と未実施校とを比較したところ, 実施校での効果として学力やコミュニケーション力の向上がみられたことを報告している。また, 山崎・中川・深尾 (2010) は, 学校支援地域本部事業を実施している小中学校の児童・生徒を対象とした調査の結果をもとに, 地域からの支援が子どもの学校生活の楽しさを促すことを示している。さらに, 大久保・時岡・平田・福圓・江村 (2011) は, 学校支援地域本部事業を実施している中学校においては, 実施していない中学校に比べて, 生徒が自分の学級や学校の荒れの程度を低く感じていることを明らかにしている。このように, 学校支援地域本部事業は, 子どもの学習面から学校の環境的側面まで, 幅広く肯定的な効果をもたらし得るものといえる。

学校支援地域本部事業は, 学校を取り巻く地域や学校支援ボランティアとして参画する地域住民の側にも肯定的な影響をもたらすことが想定されている。文部科学省 (2008) は, 学校支援地域本部事業のねらいとして, 地域住民が自らの学習成果を生かす場が広がるという生涯学習としての側面に言及している。実際, いくつかの調査からも地域住民に対する肯定的な影響が示されている。たとえば, 時岡・大久保・平田・福圓・江村 (2011) では, 学校支援地域本部事業に参加した地域住民において, 「自分たちが元気になった」「生きがいを感じるようになった」等の質問に対して6割以上が肯定的な回答をしていた。ボランティア活動が自分の生きがいになるという効果は, 中川・山崎・深尾 (2010) でもみられている。学校支援地域本部事業におけるボランティア活動は, 学校や子どもにとってだけでなく, 学校支援ボランティ

アとして活動する地域住民にとっても有意義なものであるといえる。

学校支援ボランティアの動機づけ

学校支援地域本部事業は, 学校にかかわろうという地域住民の意欲に支えられて継続されている事業であるといえる。学校支援地域本部事業では, 学校側の受け入れ態勢や地域コーディネーターのマネジメント力が必要であると同時に, 地域住民の積極的な学校への関与と自発的な参加が不可欠な要素となる。そのため, 学校支援地域本部事業を継続していくうえでは, 学校支援ボランティアが学校での活動に参画し, 学校を支えることに対して高い動機づけを維持していることが必要である。

しかし, 学校支援地域本部事業に関するいくつかの報告をみると, 学校支援ボランティアが動機づけを維持するのが必ずしも容易ではないことが推察される。たとえば, 深尾・山崎・中川 (2011) の調査では, 学校支援経験のある地域住民はない地域住民よりも今後の学校支援の意思が強かったものの, 学校支援経験のある地域住民の約20%が今後の支援活動に対して否定的な意見をもっていることが示された。また, 時岡他 (2012) の調査では, 今後の事業継続にとってマンネリ化しない工夫が必要であるという意見が学校支援ボランティアから出されている。これらの知見は, 学校支援ボランティアの多くは高い動機づけを維持しているものの, なかには動機づけや意欲を低下させている学校支援ボランティアも少なからず存在することを示唆している。

学校支援地域本部事業は, ボランティアとして自発的かつ積極的に学校にかかわろうとする地域住民の力によって支えられている部分が多い。そのため, 学校支援ボランティアの動機づけに影響する要因を明らかにし, 動機づけを維持していくための方策を立てることが事業の継続にとって不可欠であるといえる。

自己決定理論における心理的欲求の役割

本研究では, 学校支援ボランティアの動機づ

けに影響を及ぼす心理的要因を捉える枠組みとして自己決定理論 (self-determination theory: Deci & Ryan, 2000) を取り上げる。自己決定理論は、自己決定性を核として様々な活動領域における動機づけを包括的に捉える理論である。自己決定理論の下位理論である基本的欲求理論 (basic psychological needs theory) では、人が自律性、有能感、関係性という3つの心理的欲求をもっていることを想定している。自律性の欲求 (need for autonomy) は、自身の行動を自ら決定し、行動の起源でありたいという欲求である。有能感の欲求 (need for competence) は、活動において自身の能力や有能さを感じたいという欲求である。関係性の欲求 (need for relatedness) は、他者と親密なつながりをもちたいという欲求である。これら3つの心理的欲求が満たされる時、人は当該の活動に対して積極的に取り組むことができるとされている。

心理的欲求の充足が重要な役割を果たすことは多くの実証研究から明らかにされている。日常生活において、3つの心理的欲求が充足される経験をする事で、肯定的な感情や精神的健康が高まることが示されている (Milyavskaya, Gingras, Mageau, Koestner, Gagnon, Fang, & Biché, 2009; Reis, Sheldon, Gable, Roscoe, & Ryan, 2000)。たとえば、Kasser & Ryan (1999) は、高齢者施設に居住する利用者において、施設内での自律性や関係性の感覚が生活満足度を高めていることを報告している。また、Deci, Ryan, Gagné, Leone, Usunov, & Kornazheva (2001) は、一般の会社員において、日々の仕事のなかでの心理的欲求の充足が職務への積極的な取り組みを促すことを明らかにしている。

自己決定理論からみた学校支援ボランティアの動機づけ

自己決定理論の枠組みにもとづくならば、学校支援地域本部事業における学校支援ボランティアにとっても、心理的欲求が満たされるような経験が重要であると考えられる。Gagné

(2003) は、大学生において、ボランティア活動中に心理的欲求が満たされる経験をしているものほど、ボランティア活動に対する心理的な関与の度合いが高く、実際にボランティアに費やす時間が多いことを報告している。学校支援ボランティアにおいても、ボランティア活動のなかでの心理的欲求が満たされる経験が、動機づけを支えるうえで重要な役割を果たしていると考えられる。すなわち、ボランティア活動において、自律的に活動に取り組んでいるという感覚や、自身の能力を発揮できているという感覚、他者と親密にかかわることができているという感覚をもてる時、学校支援ボランティアは動機づけを維持できるのである。

学校支援地域本部事業でのボランティア活動においては、関係性の欲求を満たし得る他者として、生徒、学校教員、他の学校支援ボランティアの三者を考えることができる。ボランティア活動のなかで、生徒や教員、他の学校支援ボランティアと積極的にかかわり、親密さや情緒的なつながりを感じることで、ボランティアに対する動機づけが高まると考えられる。ただし、三者のそれぞれで動機づけに対する影響は異なる可能性がある。La Guardia, Ryan, Couchman, & Deci (2000) は、重要な他者との関係における欲求の充足が愛着を介してウェルビーイングに及ぼす影響を検討し、両親や友人など人物によってその効果が異なることを明らかにしている。本研究では、生徒、教員、他の学校支援ボランティアの三者を区別したうえで、関係性欲求の充足が学校支援ボランティアの動機づけに及ぼす影響を検討する。

本研究の目的

本研究では、学校支援地域本部事業における学校支援ボランティアを対象に、ボランティア活動中の心理的欲求の充足経験が動機づけに及ぼす影響を検討する。ボランティア活動において、自律性、有能感、関係性という心理的欲求が満たされるほど、学校支援ボランティアの動機づけが高まると予想される。なお、学校支援ボランティアの動機づけには、ボランティア活

動を通して学校に貢献したいという動機づけとボランティア活動そのものに対する動機づけの2つの側面があり得る。前者のボランティア活動を通して学校に貢献したいという動機づけは、これまでの学校支援地域本部事業に関する調査で検討されてきた側面であり（深尾他、2011）、事業の目的の本質的な部分にかかわるものである。一方で、後者のボランティア活動に対する動機づけは、学校支援ボランティアとして参画する地域住民にとっての効果や生涯学習的な観点から検討すべき側面である。岩崎・松永（2011）は、生涯学習活動の有無やその内容が学校支援に対する意識に影響していることを報告しており、ボランティア活動そのものに対する動機づけが学校支援ボランティアとして参画する意欲を支えている部分もあると考えられる。また、学校種に関して、小学校に比して中学校での学校支援地域本部事業の取り組みやその成果の検証が少ないことが指摘されており（時岡・大久保・岡田、2013）、中学校における事業のあり方についての検証が必要であると考えられる。本研究では、中学校における学校支援地域本部事業を対象に、学校支援ボランティアが動機づけを保ち、積極的に取り組むための条件について示唆を得ることを目的とし、心理的欲求の充足が動機づけの2つの側面に及ぼす影響について検討する。

方法

調査協力者

A県内の3つの中学校において、学校支援地域本部事業として学校にかかわっている学校支援ボランティア120名に質問紙への回答を求めた。回答が得られたもののうち心理尺度の回答に欠損値がみられた対象者のデータを省き、最終的に87名（男性39名、女性47名、無回答1名）の回答を分析対象とした。対象者の年齢帯は、20代が3名（3.53%）、30代が3名（3.53%）、40代が14名（16.47%）、50代が17名（20.00%）、60代が28名（32.94%）、70代が20名（23.53%）であり、平均年齢は59.25歳（ $SD=12.83$ ）であっ

た。対象者のうち、有職者は33名、無職もしくは主婦が44名であった（無回答は10名）。

調査時期

2013年3月に調査を実施した。

質問紙

参加しているボランティア活動 参加しているボランティア活動として、①読み聞かせ（司書補助）、②登下校安全、③環境整備、④学習支援、⑤部活動支援、⑥ゲストティーチャー・地域や学校行事の支援から選択してもらった。

ボランティア活動における心理的欲求の充足 ボランティア活動における心理的欲求の充足について、自己決定理論における3つの心理的欲求に関する概念的定義（Deci & Ryan, 2000; Vallerand & Ratelle, 2002）や心理的欲求の充足尺度（Gagné, 2003; 大久保・長沼・青柳, 2003）をもとに作成した。動機づけ研究を専門とする2名の大学教員が協議をし、ボランティア活動のなかで3つの心理的欲求が充足される経験を測定する項目を作成した。作成においては、概念的定義や先行研究の項目を踏まえつつ、学校支援ボランティアの現状に即した自然な表現になるように留意した。自律性の欲求は、「自身の行動の起源でありたいという欲求」（Vallerand & Ratelle, 2002, p.48）であり、「毎日の生活で自分らしくいられると感じる」「たいてい自分の意見や考えを自由に表現できていると思う」などの項目で測定される。有能感の欲求は、「望ましい結果を生みだしたり、望ましくない結果を避けたりすることにおいて有能であると感じられるように、環境と効果的にかかわりたいという欲求」（Vallerand & Ratelle, 2002, p.48）であり、「自分が何かをしているときには、周りの人は上手だと言ってくれる」「毎日の生活において、自分の能力を示す機会があまりない（逆転項目）」などの項目で測定される。関係性の欲求は、「重要な他者とのつながりをもちたいという欲求」（Vallerand & Ratelle, 2002, pp.48-49）であり、「知り合いになった人とはうまくやっている」「自分の周りにいる人のことが好きだ」などの項目で測定される。これらをもとに、それぞれの欲求の充足につい

て3項目ずつを作成した (Table 1)。なお、関係性の欲求については、生徒との関係、教師との関係、他の学校支援ボランティアとの関係を弁別した。結果的に5下位尺度各3項目の合計15項目を作成した。各項目に対して、「1：感じなかった」から「5：感じた」の5件法で回答を求めた。

ボランティア活動を通じた学校貢献に対する動機づけ 中川他(2010)を参考に、ボランティア活動を通じた学校貢献に対する動機づけを測定する3項目を作成した(「ボランティア活動を通じて学校の役に立ちたい」「ボランティア活動を通じてよりよい学校を作っていきたい」「ボランティア活動を通じて学校を支えていきたい」)。各項目に対して、「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」の5件法で回答を求めた。

ボランティア活動に対する動機づけ Gagné(2003)のボランティア活動への取り組みを測定する項目を参考に、ボランティア活動そのも

のに対する動機づけを測定する3項目を作成した(「今後も積極的にボランティア活動に参加したい」「今後もボランティア活動に一生懸命取り組んでいきたい」「ボランティア活動にできるだけ多くの時間を割きたい」)。各項目に対して、「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」の5件法で回答を求めた。

結果

参加しているボランティア活動

参加しているボランティア活動について集計した。それぞれのボランティア活動に参加した人数は、読み聞かせ(司書補助)が15名、登下校安全が42名、環境整備が32名、学習支援が32名、部活動支援2名、ゲストティーチャー・地域や学校行事の支援が16名であった。1つのボランティア活動のみに参加しているものは51名、2つ以上のボランティア活動に参加しているものは34名であった(無回答2名)。

Table 1 ボランティア活動における心理的欲求の充足尺度の記述統計量と確認的因子分析の結果

	Mean	SD	因子負荷量
自律性欲求の充足			
自分のやりたいことをやっている	3.22	0.97	.88
自分の意見や考えを自由に表現できている	3.24	0.96	.85
自分らしさを出せている	3.36	0.95	.82
有能感欲求の充足			
自分の知識や経験を役立てられている	3.34	0.91	.96
自分の得意分野や特技を活かすことができている	3.22	0.92	.89
自分の力を十分に発揮できている	3.23	0.83	.83
生徒との関係性欲求の充足			
生徒たちとよい関係を築けている	3.46	0.93	.89
生徒たちとたくさん会話ができています	3.38	1.07	.86
生徒たちとのかかわりが楽しい	3.87	0.85	.65
教員との関係性欲求の充足			
学校の先生たちとよい関係を築けている	3.43	0.90	.93
学校の先生たちとたくさん会話ができています	3.44	0.90	.93
学校の先生たちとのかかわりが楽しい	3.40	0.96	.86
他の学校支援ボランティアとの関係性欲求の充足			
他のボランティアの人たちとよい関係を築けている	3.71	0.96	.95
他のボランティアの人たちとのかかわりが楽しい	3.66	0.99	.94
他のボランティアの人たちとたくさん会話ができています	3.79	0.93	.89

尺度構成

ボランティア活動における心理的欲求の充足15項目について、記述統計量を算出した (Table 1)。平均値 $\pm 1SD$ を基準に天井効果と床効果を検討したところ、いずれの項目も可能得点範囲内であり、天井効果も床効果もみられなかった。そこで、理論的に想定される5因子を潜在変数とする確認的因子分析を行った (Table 1)。因子間にはすべて共分散を想定した。パラメータの推定は最尤推定法で行った。適合度について、 χ^2 値は有意であったものの ($\chi^2(80) = 114.99, p < .01$), CFI = .97, RMSEA = .07と十分な値を示したため、5因子解が妥当であると判断した。3項目ずつの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .84 \sim .95$ と高い信頼性を有することが示された。それぞれ3項目ずつの加算平均を下位尺度得点とした。

ボランティア活動を通じた学校貢献に対する動機づけの3項目について α 係数を算出したところ、.90と高い値を示した。また、ボランティア活動に対する動機づけの3項目について α 係数を算出したところ、.87と高い値を示した。そのため、前者3項目の加算平均を学校貢献に対する動機づけ、後者3項目の加算平均をボランティア活動に対する動機づけとした。

ボランティア活動における心理的欲求の充足と動機づけとの関連

ボランティア活動における心理的欲求の充足と学校貢献に対する動機づけ、ボランティア活動に対する動機づけの相関係数を算出した

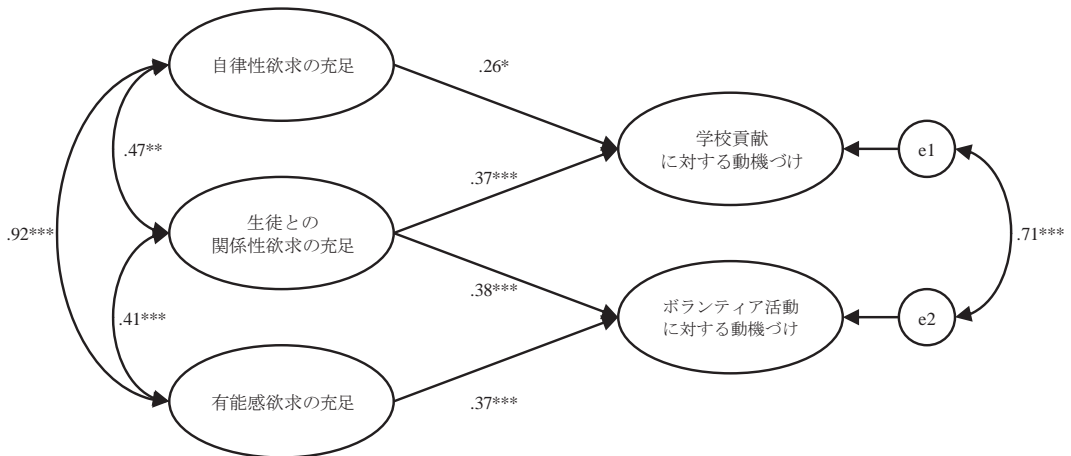
(Table 2)。次に、学校貢献に対する動機づけとボランティア活動に対する動機づけのそれぞれに関連する心理的欲求の側面を明らかにするために重回帰分析を行った。説明変数間に強い相関がみられる部分があったため、変数選択はステップワイズ法によって行った。その結果、学校貢献に対する動機づけには、生徒との関係性欲求の充足 ($\beta = .39, p < .001$) と自律性欲求の充足 ($\beta = .25, p < .05$) が有意な関連を示した。2変数による説明率は29%であった ($F(2,84) = 17.29, p < .001$)。ボランティア活動に対する動機づけには、生徒との関係性欲求の充足 ($\beta = .44, p < .001$) と有能感欲求の充足 ($\beta = .27, p < .01$) が有意な関連を示した。2変数による説明率は36%であった ($F(2,84) = 23.82, p < .001$)。

心理的欲求の充足が学校貢献に対する動機づけとボランティア活動に対する動機づけに影響するモデルを想定し、SEMによるパス解析を行った。重回帰分析の結果をもとに、心理的欲求の充足は、自律性欲求の充足、有能感欲求の充足、生徒との関係性欲求の充足を取り上げた。各概念に対応する潜在変数を想定し、それぞれ3項目を観測変数とした。分析には項目間の分散共分散行列を用い、パラメータの推定は最尤推定法によって行った。適合度について、 χ^2 値は有意ではあったものの ($\chi^2(82) = 126.96, p < .001$), CFI = .96, RMSEA = .08と十分な値を示したため、モデルを採択した (Figure 1)。自律性欲求の充足 ($\gamma = .37, p < .001$) と生徒との関係性欲求の充足 ($\gamma = .26,$

Table 2 変数間の相関係数と記述統計量

	1	2	3	4	5	6	Mean	SD
1. 自律性欲求の充足							3.27	0.87
2. 有能感欲求の充足	.83***						3.26	0.83
3. 生徒との関係性欲求の充足	.43***	.38***					3.57	0.83
4. 教員との関係性欲求の充足	.36***	.43***	.47***				3.42	0.86
5. 他の学校支援ボランティアとの関係性欲求の充足	.51***	.43***	.59***	.54***			3.72	0.91
6. 学校貢献に対する動機づけ	.41***	.37***	.49***	.40***	.40***		3.98	0.72
7. ボランティア活動に対する動機づけ	.44***	.44***	.55***	.41***	.45***	.78***	3.73	0.79

*** $p < .001$



注. 観測変数は省略した。** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure 1 ボランティア活動における心理的欲求の充足が動機づけに影響するモデル

$p < .05$) から学校貢献に対する動機づけに正のパスが示され、有能感欲求の充足 ($\gamma = .37, p < .001$) と生徒との関係性欲求の充足 ($\gamma = .38, p < .001$) からボランティア活動に対する動機づけに正のパスが示された。

考察

本研究では、学校支援地域本部事業における学校支援ボランティアが動機づけを保ち、積極的に取り組むための条件について示唆を得ることを目的としていた。そのために、学校支援ボランティアの動機づけを支える要因として、自律性、有能感、関係性という3つの心理的欲求の充足の影響を検討した。以下に、本研究の結果とそこから示唆される点について述べる。

1つ目に、学校貢献に対する動機づけには、自律性欲求の充足と生徒との関係性欲求の充足が関連を示した。つまり、ボランティア活動において、自らの意思や自己決定によって学校にかかわっているという感覚をもち、生徒とのあいだに親密なつながりを感じられるとき、学校支援ボランティアは学校に貢献したいという動機づけを維持できるといえる。Gagné (2003) は、大学生ボランティアにおいて、他者からの自律性支援が動機づけに影響することを明かにしている。ボランティア活動は、個々人の意思

に委ねられた自発的な活動であるため、そこで自律性の感覚をもてるのが動機づけにとって重要な影響力をもつものと考えられる。また、深尾他 (2011) の調査では、地域の大人が子どもと積極的にかかわっていると感じている地域住民ほど、学校支援活動をしたいと回答しており、生徒との直接的なかわりが学校に貢献したいという意欲や動機づけを維持するうえで重要な役割を果たしていると考えられる。

2つ目に、ボランティア活動に対する動機づけには、有能感欲求の充足と生徒との関係性欲求の充足が関連を示した。ボランティア活動そのものに対して動機づけを保つためには、まず自分の得意なことで活動できていると感知することが重要であるといえる。また、学校支援に対する動機づけと同様に、生徒とのあいだで関係性の欲求が満たされることは、ボランティア活動に対する動機づけにとっても影響力をもつと考えられる。自分の得意な部分を活かして生徒とかかわりながら活動をできているという感覚が、学校支援ボランティアの動機づけを支えるのである。

以上の結果から示唆されることは次の2点である。1点目に、それぞれの学校支援ボランティアが、自分の特技を生かし、かつ自己決定感をもてるようなかたちで、ボランティア活動の担当を割り振るべきである。前者の自分

の特技を生かせるようにという点は、学校支援ボランティアと活動とのマッチングの問題である。生涯学習活動を行っている地域住民は、その多くが学習の成果を活用したいと考えており(岩崎・松永, 2011), 自己の特技や能力を發揮する場を求めていると考えられる。そのため、個々人の特技や意向を踏まえたうえで、どのようなボランティア活動に携わってもらうのがよいかを十分に検討し、事業全体として活動を組織化することが必要である。2点目に、ボランティア活動のなかで、可能な限り地域住民と学校の生徒との交流の機会を増やすべきである。例えば環境整備のように、学校支援ボランティアだけで実施可能な活動もあるかもしれない。しかし、その場合でもなるべく生徒との交流のなかで実施することが、学校支援ボランティアの動機づけを維持するうえで有効である。そのためには、教師が生徒に学校支援ボランティアの存在や活動について伝え、両者の関係をつなぐことが必要となる。

これまでは学校支援地域本部事業が開始された初期の段階であったため、学校支援地域本部を設定し、学校と地域をつないでくことに焦点があてられていたと思われる。しかし、今後は各地域によって定着しつつある事業を維持していくことが重要な課題となる。その過程では、学校支援ボランティアの動機づけを維持していくための方策が不可欠となるだろう。洲脇・大西(2011)は、学校支援地域本部事業のこれからの課題の1つにボランティアの確保を挙げているが、すでに学校にかかわっている地域住民の動機づけを支えていくことがこの課題の解決にもつながるものと考えられる。本研究では、ボランティア活動を通して学校に貢献しようという動機づけとボランティア活動そのものに対する動機づけに影響し得る心理的要因を明らかにした。地域住民がボランティア活動をどのように経験しているかに注目し、自律性や有能感、生徒との関係性をより豊富に感じられるような体制を整えていくことが、今後の事業を継続していくうえで重要である。

最後に研究上の課題を2点挙げる。1点目

に、より大規模なサンプル数で本研究の結果を確認することである。本研究で分析対象としたのは87名であり、一般化するには必ずしも十分な数とはいえない。小数サンプルから理論的に想定し得る関連性を見出しているものの、より大規模なサンプル数で本研究と同様の結果が得られるかを追認する必要がある。2点目に、それぞれの心理的欲求を充足する経験の具体的な内容を明らかにすることである。本研究では、自律性や有能感、生徒との関係性といった心理的欲求の充足が、学校支援ボランティアの動機づけに影響している可能性が示された。しかし、具体的にどのような経験や生徒とのかわり方が、心理的欲求を満たすのかは明らかではない。心理的欲求を満たし得るような、具体的なボランティア活動のあり方を探っていくことが必要である。

引用文献

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The "what" and "why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11, 227–268.
- Deci, E. L., Ryan, R. M., Gagné, M., Leone, D. R., Usunov, J., & Kornazheva, B. P. (2001). Need satisfaction, motivation, and well-being in the work organizations of a former eastern bloc country: A cross-cultural study of self-determination. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 930–942.
- 深尾 誠・山崎清男・中川忠宣(2011). 学校という場を通してのコミュニティづくりに関する調査研究—学校への地域住民参加を中心に—大分大学経済論集, 62, 147–174.
- Gagné, M. (2003). The role of autonomy support and autonomy orientation in prosocial behavior engagement. *Motivation and Emotion*, 27, 199–223.
- 岩崎 功・松永由弥子(2011). 学校支援地域本部事業をめぐる現状と課題(2)—地域住民の意識調査から—静岡産業大学情報学部研究紀要, 13, 179–212.
- Kasser, V. G., & Ryan, R. M. (1999). The relation

- of psychological needs for autonomy and relatedness to vitality, well-being, and mortality in a nursing home. *Journal of Applied Social Psychology*, **29**, 935–954.
- La Guardia, J., G., Ryan, R. M., Couchman, C. E., & Deci, E. L. (2000). Within-person variation in security of attachment: A self-determination theory perspective on attachment, need fulfillment, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 367–384.
- Milyavskaya, M., Gingras, I., Mageau, G. A., Koestner, R., Gagnon, H., Fang, J., & Biché, J. (2009). Balance across contexts: Importance of balanced need satisfaction across various life domains. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **35**, 1031–1045.
- 文部科学省 (2008). 「みんなで支える学校 みんなで育てる子ども」—「学校支援地域本部事業」のスタートに当たって— 文部科学省 (http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/004/002.htm) (2013年7月25日)
- 文部科学省 (2010). 平成22年度「学校支援地域本部事業」等の事業効果の把握に向けた調査研究の結果について 報告書
- 中川忠宣・山崎清男・深尾 誠 (2010). 「学校支援」についての保護者と住民の意識の相違に関する一考察 大分大学高等教育開発センター紀要, **2**, 49–67.
- 大久保智生・長沼君主・青柳 肇 (2003). 学校環境における心理的欲求の充足と適応感との関連 ヒューマンサイエンスリサーチ, **12**, 21–28.
- 大久保智生・時岡晴美・平田俊治・福圓良子・江村早紀 (2011). 学校支援地域本部事業の取り組み成果にみる学校・地域間関係の再編(その2)—生徒, 学校支援ボランティア, 教師の意識調査から— 香川大学教育実践総合研究, **22**, 139–148.
- Reis, H. T., Sheldon, K. M., Gable, S. L., Roscoe, J., & Ryan, R. M. (2000). Daily well-being: The role of autonomy, competence, and relatedness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 419–435.
- 洲脇一郎・大西正展 (2011). 学校支援地域本部事業と生徒指導・学習指導 児童教育学研究, **30**, 41–57.
- 高橋 興 (2011). 学校支援地域本部をつくる—学校と地域による新たな協働関係— ぎょうせい
- 時岡晴美・大久保智生・平田俊治・福圓良子・江村早紀 (2011). 学校支援地域本部事業の取り組み成果にみる学校・地域間関係の再編(その1)—地域教育力に注目して— 香川大学教育実践総合研究, **22**, 129–138.
- 時岡晴美・大久保智生・岡田 涼 (2013). 学校支援ボランティア参加者からみた学校支援地域本部事業の成果と課題—岡山県備前中学校における実態調査から— 香川大学生涯学習教育研究センター研究報告, **18**, 23–33.
- Vallerand, R. J., & Ratelle, C. F. (2002). Intrinsic and extrinsic motivation: A hierarchical model. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester. pp.37–63.
- 山崎清男・中川忠宣・深尾 誠 (2010). 地域との関わりによる子どもの学習活動の推進 日本生活体験学習学会誌, **10**, 35–41.

謝辞

本研究を行うにあたりご協力いただきました学校支援ボランティアの皆様, 中学校の先生方に厚くお礼申し上げます。